

異文化体験前の個人特性から見る異文化体験者の不適応感 —異文化不適応想定、ゆとり感、自律的留学動機の視点から—¹

鉄川 大健・谷口 淳一・森下 高治

問題

国際化社会

国際化が進んできた日本社会には海外の国々から多くの留学生や海外赴任者が来日している。また、現在の日本には、外国企業や外国料理店など、日本にいながらして多くの外国文化に触れることができる。さらに、多くの外国人が日本で生活をしており、facebookなどのSNSの普及に伴い、外国人と知り合うことも比較的容易になってきている。また、多くの日本人も留学や海外赴任を経験するようになってきている。文部科学省高等教育局学生・留学生課(2010)によると、海外からの留学生の受け入れは2009年現在でおよそ13万3千人となっており、およそ7万5千人の日本人学生等が欧米諸国、オセアニア、アジアなどの様々な地域に留学をしている。また、外務省領事局政策課(2013)による在留邦人の調査では、海外に3か月以上在留している日本国籍を持つ者には「長期滞在者」と「永住者」があるとされている。「長期滞在者」は外国政府職員、海外赴任者、留学生、ワーキングホリデーなど、いずれ日本に帰国することが前提で一時的に海外に3か月以上居住している者を指す。「永住者」は海外諸国において永住権が認められ、居住の本拠地を海外に移した者を指す。2013年現在、839,516人(前年比1798人増)の「長期滞在者」が海外で生活をしており、418,747人(前年比6888人増)の「永住者」が海外に移住していることが示されている。また、この海外在留者数は、この調査が始まった1968年以降過去最多となったことが示されている。このことから、国際化の進んだ日本では、今後も多くの日本人が異文化の中で生活をする機会が増えると予測される。また、自ら異文化体験を求め、海外渡航をする者も増えていくと予測される。

異文化体験

異文化とは、早矢仕(2003)によると、個人の属する文化と異なる文化のことであり、一般的にはその個人の属していない社会や集団の文化のことでありとされている。一般的な異文化として、外国文化を考える人も多い。しかしながら、「サブカルチャー」も異文化の1つであり、黒木(1996)は、階級や性別、世代や職業、国内での居住地域なども異文化であると述べている。

黒木(1996)は、異文化接触や異文化体験は、単に違う文化を体験することや違う文化に接することではなく、人が他文化の人と関わることであり、海外旅行とは違い、自身の変容を伴うものであるとしている。また、サザーランド(2010)は個人が身に付けてきた慣習や教養などに基づく文化背

景とは異なった文化背景を持つ者同士で行われる、対面的相互作用であるとしている。つまり、異文化体験とは異なった文化に住む人々が対面的に接触することで、その経験を通して自身の変容を伴うプロセスである。

そして、中村・石川(2010)によると、異文化体験において、自国文化での経験と異なる経験をすることで、個人の価値観に影響が及ぼされる。さらに、川内(2006)は、異文化体験は価値観を再認識し、文化的同一性を発見でき、心理的自立が確立されるなど、転換期を迎えることができると述べている。このように、異文化体験をすることは異文化体験者にとってポジティブな影響をもたらすと考えられる。一方で、安達(2008)は異文化と接触することにより摩擦が生じると示している。これらのことから、人々は異文化体験をすることによって利益を得ることができると考えられるが、同時に、様々な不利益が生じてしまうとも考えられる。

異文化体験の問題

このように、異文化と接触することで不利益が生じることがある。その1つに異文化接触ストレスがある。一般に、ストレスとは様々な要因によって緊張や当惑、身体症状が引き起こされることである(Lilienfeld, Lynn, Namy & Woolf, 2009)。このことから、異文化接触ストレスとは、異文化体験をすることによる緊張や当惑であり、また、身体症状が引き起こされることであると考えられる。異文化体験をすることで、自国文化では当然のように行われてきた事象が打ち砕かれ、トラブルが生じ、ストレスが発生する(島田, 1991)。このことから、異文化接触時に生じたトラブルがストレスとなり、異文化接触ストレスが生じると考えられる。

また、カルチュアショックも異文化体験時の不利益としてよく知られている。渡辺(2002)は、カルチュアショックは、異文化を体験した時の驚きや戸惑い、不安の体験であると述べている。また、星野(2010)は、異文化へ移行する時、あるいは異文化が侵入してきた時に、文化的接触が起き、何らかの変化が起きる前に経験される、文化的現象でもあり、心身に影響する個人的現象であると述べている。つまり、カルチュアショックとは、異文化体験時の文化的な問題から生じる個人内のストレス反応であると考えられる。そして、カルチュアショックは、異文化という環境の異なる地域に行く以上、避けては通れない問題であると考えられる。

異文化適応

このように、異文化体験をすることで、様々な問題が生じる。そのため、異文化体験者の異文化に対する適応が大きな課題となる。Yamada, Thompson & Thompson(1994)

は、異文化体験者がその国の文化を理解し、その文化での生活において適切に異文化の慣習を自分の中に取り入れていくことが異文化適応であると述べている。異文化適応に関しては、今まで様々な研究がなされてきている。Lysgard(1956)は、異文化適応に関して横断的研究を行い、異文化体験初期には高い幸福感があるが、その後一気に落ち込み、それを経てまた持ち直すという適応の過程がU字曲線になることを提唱した。さらに、Oberg(1960)は、異文化体験初期を希望に満ち溢れた「蜜月期」とし、その後を、異文化の差異を感じる「敵対期」とし、次の段階を「回復期」、そして最後に異文化適応が完了し、異文化を受容する「適応期」と段階的に区別した。このように、20世紀後半には異文化適応研究が多く行われてきた。その後、異文化適応の推移研究より、異文化適応に影響する要因研究が主流となっている。代表的な研究として、Kim(2001)は、個人のパーソナリティや現地環境などの様々な要因により異文化適応の適応過程が決まると示した。

異文化適応要因の先行研究

異文化適応要因には様々あり、言語能力、パーソナリティ、動機づけなどの個人特性要因と、対人および文化距離、ソーシャルサポート、現地の受け入れ態度などの環境特性要因の2つに大別できる(宮城, 2011)。

本研究では、異文化体験に対する個人特性の影響を検討することを大きな目的とした。個人特性要因に関する研究としては、小林(2000)の、自文化アイデンティティが異文化体験時の適応過程にどう影響するのかの研究があり、自文化アイデンティティが肯定的であることが、異文化適応を促進する要因となることを示唆している。また、小林・Wangwan・渡辺(2009)の研究では、自尊感情は異文化適応の重要な要因であることを示唆している。さらに、孫(2009)は、自己効力感とパーソナリティの関連と異文化適応の研究を行い、損害回避特性および新奇性追求特性が高いと不適応傾向となり、協調性および自己指向性の高さは適応的に作用すると示唆している。また、譚・今野・渡邊(2009)は、内発的留学動機の異文化対人適応への肯定的な影響を示唆し、一方で、外発的留学動機が不適応感を抱かせるということを示した。このように、多くの個人特性が異文化適応の要因であることが、先行研究で明らかになってきた。

しかし、高井(1989)は、これまで行われてきた研究は、各研究間の傾向がはっきりと分らない状態であると述べている。このことから、異文化適応研究に関して縦断的研究が必要であると考えられる。

このように、異文化適応の研究にあたり多少の問題もあるが、現在までに様々な要因が異文化適応に影響することが示されている。本研究では、異文化適応に影響すると推測される3つの個人特性要因によって研究を行うこととした。

本研究で着目した個人特性要因

1つ目の要因として、異文化体験前に、「自分は異文化に適応できないだろう」と考える認知である『不適応想定』を用いた。宮城(2005)は、留学予定者に対し予測される困難を自由回答させ、異文化体験前にはすでに、異文化体験予定者は待ち受けている困難を認知していると述べている。異文化体験前の異文化適応に対する期待や不安が異文化体験時の異文化適応に影響すると推測される。また、このような認知的な要因に着目することで、異文化体験前の認知の変容による適応支援につなげることが可能であると考えられる。よって、異文化体験前の『不適応想定』を異文化適応に影響する認知的要因として検討することとした。

次に、2つ目の要因として、生活のゆとり感を用いた。富田(2008)は、ゆとりがない状態を不安や焦燥感に圧倒され視野が狭くなる状態とし、逆に、充実感や安心感がある状態はゆとりがある状態であると述べている。このゆとり感に関して今まで様々な研究がおこなわれてきている。古川・山下・八木(1993)は、ゆとりとはどのような構造からできているのかを検討することで、ゆとり(感)尺度を作成した。この尺度を用い、高島・五十嵐・平尾・清水・中村(2004)は美容専門学校生において、学校適応とゆとり感の間には有意な相関関係が認められたことを示している。また、このゆとり感がない状態の時には、視野が狭くなり、どんな状況にも不安や不満を抱くと考えられる。そのため、自国においてさえゆとりを感じることができないのであれば、衝突の多い異文化と接触した時には尚更、不安や不満を抱くのではないかと考えられる。このことから、ある環境における適応感とゆとり感の間には関連があると考えられ、異文化体験時にも適用可能なのではないかと推測される。よって、ゆとり感を異文化適応に影響する要因として検討することとした。

さらに、3つ目の要因として、自律的留学動機を用いた。田畑・田中(1991)は、積極的な理由で留学をしている者に比べ、受け身的な理由で留学をしている者は、異文化での生活にあまりとけ込めていないことを示唆している。また、譚ら(2009)は、自律的留学動機が高い留学生は対人適応感が高く、逆に自律的留学動機が低い留学生は対人適応感が低いことを示している。しかし、若生・長谷川・中山(2012)は、自己決定的な留学動機であるかどうかに関わらず、留学中の適応感が高くなると示唆している。このように、留学動機が異文化での生活の適応に影響するという報告がされているが、日本人留学生を対象にしたものは少なく、また、これまでの研究結果には一貫性がないことがわかる。よって、自律的留学動機を日本人留学生の異文化適応に影響する要因として検討することとした。

目的

本研究の大きな目的は、異文化適応に影響する個人特性要因を明らかにすることである。具体的な目的としては、異文化体験前の不適応想定、自国ゆとり感、および自律的

留学動機が異文化体験時の異文化適応感にどのような影響を与えるのかを検討することを目的とした。

仮説

小泉(1995)の研究では、小学校から中学校への環境移行時の期待や不安が中学校入学後の学校適応感に影響するのかを検討し、不安が高いと不適応感を抱きやすいという結果を示している。本研究における異文化体験を環境移行と捉えれば、不適応想定が高い者は、異文化体験時の異文化不適応感が高くなると推測される。しかし、これは宮城(2005)の研究に反する結果である。ただし、宮城(2005)の研究においては、期待を過剰に持ちすぎていることにより、その期待が裏切られ、不適応感を感じるのではないかと考えられるために、本研究では、不適応想定が高いと異文化体験時の不適応感が高くなると推測された。(仮説1)。

さらに、長年住み慣れた自国においてゆとりを感じる事ができない者は、ストレスを感じやすくなる異文化へ移動したときに、自国においてゆとりを感じていた者よりもストレスを感じると推測される。つまり、自国ゆとり感が高い者は、異文化不適応感が低くなると推測される(仮説2)。

また、外国人留学生では留学動機と適応感の間には関連が認められている(譚ら, 2009; 若生ら, 2012)。よって、日本人留学生においても関連が認められ、自律的留学動機が異文化不適応感を低減させると推測される(仮説3)。

方法

調査参加者

2012年3月および7月、8月にアメリカ合衆国オレゴン州のポートランド州立大学(Portland State University; PSU)に1ヶ月間のAmerica Plus Language and Culture Program (APLCP)により留学していた日本人留学生132名(男性73名、女性59名、平均年齢 20.23 ± 1.96 歳)を対象に質問紙調査を行った。その内、最終的な有効データ人数は、85名(男性43名、女性42名、平均年齢 20.25 ± 2.24 歳)であった。²

プログラム(APLCP)について

PSUが実施する海外語学研修プログラムの1つである。平日はPSU付属の語学学校であるIntensive English Language Program (IELP)の専属教員によるコミュニケーションや文化、現地の経済などに関する授業を受け、現地の企業や博物館等を訪問するフィールドトリップも行われる。プログラムに参加した学生のみでクラス構成のため、生徒は全員日本人である。休日は基本的には自由な時間ではあるが、ホストファミリーと過ごすことが推奨されている。

質問紙

留学生適応尺度 異文化体験前の不適応想定および異文化体験時の不適応感を測定する尺度として、江村(1993)が使用した留学生適応尺度を使用した。本尺度はBaker(1981)のFreshman's Scale for Adjustment (FSA)

尺度を上原(1988)が改訂して作成したものである。本調査では、本尺度の質問項目の56項目から26項目を選出した。本尺度の下位尺度は、学習・研究、心身健康・情緒、対人関係、文化、住居・経済の5尺度であり、これらの下位尺度ごとに偏りが出ないように質問項目を選出した。このうちの8項目は逆転項目であった。非常によくあてはまる(5点)、ややあてはまる(4点)、どちらとも言えない(3点)、ややあてはまらない(2点)、まったくあてはまらない(1点)の5件法を採用した。ただし、異文化体験前の不適応想定に関しては、異文化体験時のどのくらい不適応になるかを想像させて回答させるような質問形式とした。また、異文化体験時の不適応感には、その時点での不適応感について回答させた。

ゆとり(感)尺度 自文化および異文化での生活のゆとり感を調べるために、古川ら(1993)が作成したゆとり(感)尺度を使用した。本調査では、本尺度の質問項目の50項目から27項目を選出した。本尺度の下位尺度は、遊楽性、環境快適性、挑戦性、時間自由性、有能性、富裕性、満足安定性、自由奔放性の8尺度であり、これらの下位尺度ごとに偏りが出ないように質問項目を選出した。このうちの3項目が逆転項目であった。全くそうだ(7点)、かなりそうだ(6点)、ややそうだ(5点)、どちらともいえない(4点)、ややちがう(3点)、かなりちがう(2点)、まったくちがう(1点)の7件法を採用した。本尺度は対象者が雇用者全般であったので、質問項目の内容を大学生が対象となるように表現を修正した。異文化体験前に使用する本尺度に関しては、日本での生活のゆとり感について回答させ、異文化体験時には、現地での生活のゆとり感について回答させた。

自律的留学動機尺度 留学生の異文化体験に対する動機を調べるために、譚ら(2009)が作成した自律的留学動機尺度を使用した。本調査では、本尺度の質問項目の26項目から13項目を選出した。本尺度の下位尺度は同一化的動機づけ、内発的動機づけ、取り入的動機づけ、外的動機づけの4尺度であり、これらの下位尺度ごとに偏りが出ないように質問項目を選出した。本尺度への回答には、よく当てはまる(5点)、どちらかという当てはまる(4点)、どちらでもない(3点)、どちらかという当てはまらない(2点)、まったく当てはまらない(1点)の5件法を採用した。本尺度は日本に留学してきた外国人留学生を対象としていたので、外国に留学する日本人留学生を対象とできるように表現を修正した。

これら3種類の尺度を使用して質問紙を作成した。ただし、質問紙には異文化体験前用と異文化体験時用の2種類を用意した。異文化体験前用の質問紙には、異文化体験前に想像している異文化体験時の適応度を回答させる留学生適応尺度、日本の生活に関してのゆとり(感)尺度および留学動機尺度の3種類の尺度を使用し、異文化体験時用の質問紙に関しては、その時点での適応度を回答さ

せる留学生適応尺度と現地での生活に関してのゆとり(感)尺度の2種類の尺度を使用した。なお、フェイスシートには、学籍番号、性別、年齢、学科、留学経験、留学国および留学期間を尋ねる質問項目を設けた。この時、学籍番号は計4回の調査のための通し番号として使用した。

調査手続き

本調査では、計4回の質問紙調査を行った。4回の調査全てにおいて集団実施した。まず、APLCPの現地到着後オリエンテーションにおいて、第1回調査を行った。第1回調査では、異文化体験前用の質問紙を使用して、異文化体験前の不適応感の想定、日本での生活、留学動機について回答させた。この時、本調査の主旨、本調査は合計4回の調査があることおよび任意の調査であることを説明した。また、プライバシーの保護を約束し、調査を実施した。そして、第1回調査の1週間後に第2回調査、2週間後に第3回調査、3週間後の帰国前最終オリエンテーションにおいて第4回調査の計3回の追調査を行った。この時は異文化体験時用の質問紙を使用し、その時点での不適応度および現地での生活について回答させた。

結果

各測定尺度の因子分析

因子分析を行うにあたり、留学生適応尺度およびゆとり(感)尺度に関しては、異文化の生活を十分に体験している

と考えられる時期のデータを使用することが妥当であると考へ、留学3週目(Week 3)のデータを分析に用いた。

留学生適応尺度 留学生適応尺度の26項目について、最尤法Promax回転により探索的因子分析を行った。因子負荷量.40以上を採択基準としたところ、3因子18項目が抽出された(Table 1)。上原(1988)の先行研究では、5つの領域に分かれていたが、各因子の項目から、本研究では先行研究における文化領域および心身健康・情緒領域を中心にした『文化的精神不安』を第1因子、住み心地・経済領域および心身健康領域を中心にした『日常生活不安』を第2因子、学習・研究領域を中心にした『学業生活不安』を第3因子とする因子構造であると考へられる。信頼性の検討のためにCronbachの α 係数を算出したところ、Week 3においては十分に高い値が示された。しかし、体験前、Week 1、Week 2において、Week 3に比べ、低い値が得られている因子もあったが、再検査法による信頼性分析により、級内相関係数(ICC)を算出した。その結果、『文化的精神不安(ICC = .78)』『日常生活不安(ICC = .62)』『学業生活不安(ICC = .79)』と比較的高い値が示された。よって、全時点において、十分な信頼性が確認されたので、以降の分析に使用した。

本尺度の平均尺度得点(M)と標準偏差(SD)を算出し、今後の分析に用いた。分析に先立ち、不適応想定を含む、異文化不適応感の推移を1要因の分散分析で確認し

Table 1 留学生適応尺度の因子構造と信頼性

項目	F1	F2	F3
F1: 文化的精神不安 (体験前:α=.78, Week1:α=.81, Week2:α=.79, Week3:α=.88)			
21 私は何となく不安になることがある(だろう)	.79	.00	.03
12 私は対人関係の問題で悩む(だろう)	.79	.18	-.06
13 私は現地の社会の特性はあまり理解できない(だろう)	.73	.11	-.04
19 私は自分の心理的、精神衛生上のことで悩む(だろう)	.73	.04	-.08
20 私は現地の大学での勉強を続けていく能力に自信がない(だろう)	.69	.05	-.19
8 私は現地のあいさつや礼儀がわからなくて困ることがある(だろう)	.56	-.04	.16
18 私は寂しくなることがよくある(だろう)	.55	-.26	.15
17 私は自分の授業が理解できないでイライラすることがある(だろう)	.52	.06	-.16
24 私は経済的にとても困る(だろう)	.51	-.15	-.07
22 私は現地の人とはあまりつきあおうと思わない(だろう)	.50	-.31	.11
15 私は現地の人の表現が率直で直接的なので時々イライラすることがある(だろう)	.46	-.09	.17
F2: 日常生活不安 (体験前:α=.51, Week1:α=.54, Week2:α=.58, Week3:α=.78)			
10 私の住まいの住み心地は非常に快適で満足する(だろう)	.05	.85	-.03
14 全体として、私は現地での生活に満足する(だろう)	.11	.79	.17
7 私は大変健康である(だろう)	-.05	.54	.04
5 私はよく眠れないことがある(だろう)	.28	-.47	.01
F3: 学業生活不安 (体験前:α=.61, Week1:α=.72, Week2:α=.69, Week3:α=.81)			
4 私は現地の大学での勉強が楽しい(だろう)	.03	-.08	.91
11 全体として、私は現地の大学での自分の勉強に満足する(だろう)	.13	.23	.78
16 全体として、現地の大学での人間関係に満足する(だろう)	-.19	.14	.45
	F1	-.462	-.406
因子相関	F2		.542

Table 2 異文化不適応感の推移

	Pre		Week1		Week2		Week3		F	p	多重比較 (Bonferroni)
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)			
文化的 精神不安	2.89	(.63)	2.40	(.58)	2.42	(.57)	2.39	(.72)	28.34	***	Pre > W1, W2, W3
日常生活 不安	2.64	(.69)	2.09	(.62)	2.07	(.59)	1.98	(.71)	28.95	***	Pre > W1, W2, W3
学業生活 不安	2.42	(.61)	2.28	(.77)	2.27	(.71)	2.05	(.78)	7.67	***	Pre, W1, W2 > W3

註) *** p<.001

たところ、『文化的精神不安』および『日常生活不安』においては、異文化体験時のどの時点の不適応感も、異文化体験前の不適応感よりも有意に低くなっていることが示された。また、『学業生活不安』に関しては、Week 3における不適応感が、不適応想定およびWeek 3以前の不適応感よりも有意に低いことが示された(Table 2)。

ゆとり(感)尺度 ゆとり(感)尺度の27項目について、先と同様に採択基準を因子負荷量.40以上とし、最尤法Promax回転により探索的因子分析を行った。その結果、1因子構造が妥当であると判断し、22項目が抽出した(Table 3)。古川ら(1993)の先行研究では、8因子構造であったが、本研究では、生活におけるゆとりまたは余裕として包括的に捉える。信頼性の検討のためにCronbachのα係数を算出したところ、全時点において、十分に高い値が示され、信頼性が確認された。

本尺度の平均尺度得点(M)と標準偏差(SD)を算出し、今後の分析に用いた。自国ゆとり感の平均尺度得点は

4.98(SD =.70)点であった。また、本尺度は得点が高いとゆとり感が高いことを示す。

自律的留学動機尺度 自律的留学動機尺度の13項目について、先と同様に採択基準を因子負荷量.40以上とし、最尤法Promax回転により探索的因子分析を行った。その結果、2因子11項目が抽出された(Table 4)。譚ら(2009)の先行研究では、4因子構造であったが、各因子の項目から、本研究では先行研究における同一化的動機および内発的動機を含む『内発的留学動機』を第1因子、取り入れ的動機を含む『取り入れ的留学動機』を第2因子とする因子構造であると考えられる。信頼性の検討のためにCronbachのα係数を算出したところ、各因子において十分に高い値が示され、信頼性が確認された。

本尺度の平均尺度得点(M)と標準偏差(SD)を算出し、今後の分析に用いた。『内発的留学動機』因子では4.26(SD =.62)点、『取り入れ的留学動機』因子では2.53(SD =.91)点であった。また、本尺度は、得点が高いと各因子の留学動機が高いことを示す。

異文化体験前の個人特性の異文化適応感への影響

異文化体験初期の不適応感は認知面を含む異文化体験前の個人特性から影響を受けていると推測される。よって、『文化的精神不安』『日常生活不安』『学業生活不安』の異文化体験前の不適応想定、自国におけるゆとり感、およ

Table 3 ゆとり感尺度の因子構造と信頼性

項目	F1
F1: ゆとり感(体験前:α=.88, Week1:α=.93, Week2:α=.94, Week3:α=.95)	
25 私の生活は安定している	.85
18 私の生活は充実している	.85
23 何事も楽しんでやっている	.84
24 私は今の生活に満足している	.84
26 何をするにも選択の幅は広い	.82
14 何か新しいことを始める意欲が十分ある	.81
3 学校生活は極めてうまくいっている	.81
7 他人のため、心遣いする余裕がある	.76
9 いつも向上しようと心掛けている	.74
27 たいいていのことには対処できる	.74
20 住んでいる家は十分な広さがある	.72
15 感情を素直に表すことができる	.71
10 交友関係は豊かだ	.71
5 健康に恵まれている	.68
8 家庭内はうまくいっている	.66
4 休暇は十分にある	.64
2 自分の自由になる時間がある	.64
21 精神的に安定している	.63
19 私には大きな目標がある	.58
17 周囲にとらわれることなく自由に生きている	.54
13 精神的余裕がある	.52
1 経済的な余裕がある	.45

Table 4 自律的留学動機尺度の因子構造と信頼性

項目	F1	F2
F1: 内発的留学動機(α=.80)		
10 留学したかったから	.78	.05
2 外国の文化、知識を学びたいから	.67	.00
12 外国で生活することが面白そうだから	.66	-.03
3 外国での勉強は楽しいから	.61	-.05
8 自分の視野を広め、人生経験を豊かにしたいから	.56	.08
4 自分の外国語力を上げたいから	.51	.13
1 自分が行きたいかどうかではなく、周りの人に影響されたから	-.51	.27
F2: 取り入れ的留学動機(α=.73)		
5 外国語を学ばないと不安だから	.09	.77
7 外国語を喋れないと恥ずかしいから	.04	.68
9 外国語は覚えなければならないものだから	-.04	.67
11 留学ブームでみんなが行くから	-.03	.44
		因子相関
		-.14

び、『内発的留学動機』『取入的留学動機』などの自律的留学動機などが、どのような影響を異文化体験初期の不適応感に与えているのかを検討した。また、異文化体験が進むにつれて、異文化体験前の個人特性に加え、それまでに抱いてきた異文化不適応感とその時点での異文化不適応感にどのように影響しているのかについても検討した。そのため、4つの異文化体験前の個人特性を独立変数とし、異文化体験1週目の異文化不適応感(以下、Week 1不適応)を目的変数とした重回帰分析、4つの独立変数に加え、Week 1不適応を独立変数とし、異文化体験2週目の異文化不適応感(以下、Week 2不適応)を目的変数とした重回帰分析、および、Week 2不適応を加えた6つの変数を独立変数とし、異文化体験3週目の不適応感(以下、Week 3不適応)を目的変数とした重回帰分析を行った。分析においては、異文化不適応感の3つの因子それぞれに関して行った。

文化的精神不安領域の異文化不適応感への影響 まず、異文化体験前の個人特性が、文化的精神不安領域における各週の異文化不適応に与える影響について検討した(Table 5)。その結果、各週の不適応得点のそれぞれにおいて、重相関係数はWeek 1:(R)=.59, Week 2:(R)=.69, Week 3:(R)=.76)であり、重回帰式は有意であった(Week 1: $F(4, 80)=10.65, p<.001$, Week 2: $F(5, 79)=14.26, p<.001$, Week 3: $F(6, 78)=17.97, p<.001$)。Week 1不適応においては、不適応想定が有意な正の影響($\beta =.47, p<.001$)を示していた。また、Week 2不適応には、Week 1不適応が有意な正の影響($\beta =.51, p<.001$)を示し、さらに、Week 3不適応に、自国ゆとり感が有意な負の影響($\beta =-.19, p<.05$)を示し、Week 1不適応が有意な傾向で正の影響($\beta =.19, p<.10$)を示し、Week 2不適応が有意な正の影響($\beta =.55, p<.001$)を示していた。

このことから、文化的精神不安領域において1週目には、不適応想定が高い者は異文化不適応感が高くなり、2週目になると、その影響は有意ではなくなるが、1週目の異文化不適応感が高くなると2週目の異文化不適応感が高くなる

なることが示された。そして、3週目では、1週目と2週目の異文化不適応感が高いと3週目の異文化不適応感が高くなることを示された。さらには、異文化体験前の自国でのゆとり感が高いと、異文化不適応感が低くなることを示された。

日常生活不安領域の異文化不適応感への影響 次に、異文化体験前の個人特性が、日常生活不安領域における各週の異文化不適応に与える影響について検討した(Table 5)。その結果、各週の不適応得点のそれぞれにおいて、重相関係数はWeek 1:(R)=.45, Week 2:(R)=.58, Week 3:(R)=.68)であり、重回帰式は有意であった(Week 1: $F(4, 80)=4.99, p<.01$, Week 2: $F(5, 79)=8.06, p<.001$, Week 3: $F(6, 78)=11.42, p<.001$)。Week 1不適応においては、不適応想定が有意な傾向で正の影響($\beta =.18, p<.10$)を示し、自国ゆとり感が有意な負の影響($\beta =-.33, p<.01$)を示していた。また、Week 2不適応においては、Week 1不適応が有意な正の影響($\beta =.42, p<.001$)を示していた。さらに、Week 3不適応においては、自国ゆとり感が有意な負の影響($\beta =-.21, p<.05$)を示し、Week 2不適応が有意な正の影響($\beta =.40, p<.001$)を示していた。

このことから、日常生活不安領域において1週目には、不適応想定が高い者は異文化不適応感が高くなり、また、異文化体験前の自国ゆとり感が高い者は異文化不適応感が低くなることを示された。2週目になると、そのどちらの影響も有意ではなくなるが、1週目の異文化不適応感が高いと2週目の異文化不適応感が高くなることを示された。そして、3週目では、2週目の異文化不適応感が高いと3週目の異文化不適応感が高くなり、異文化体験前の自国ゆとり感が高いと、異文化不適応感が低くなることを示された。

学業生活不安領域の異文化不適応感への影響 さらに、異文化体験前の個人特性が、学業生活不安領域における各週の異文化不適応に与える影響について検討した(Table 5)。その結果、各週の不適応得点のそれぞれにおいて、重相関係数はWeek 1:(R)=.45, Week 2:(R)=.78, Week 3:(R)=.69)であり、重回帰式は有意であった(Week 1: $F(4, 80)=4.96, p<.01$, Week 2: $F(5, 79)=24.52, p<.001$,

Table 5 異文化不適応感に対する異文化体験前の個人特性の影響³

説明変数	文化的精神不安			日常生活不安			学業生活不安		
	Week 1	Week 2	Week 3	Week 1	Week 2	Week 3	Week 1	Week 2	Week 3
不適応想定	.47 ***	.15	-.05	.18 †	.13	.03	.21 †	.12	.15
自国ゆとり感	-.15	-.10	-.19 *	-.33 **	-.13	-.21 *	-.32 **	-.17 *	-.24 *
内発的留学動機	-.09	-.10	-.03	-.11	-.12	-.10	.01	.03	.06
取入的留学動機	.08	-.01	-.08	.04	.05	.11	-.06	.02	.04
不適応感(Week 1)	—	.51 ***	.19 †	—	.42 ***	.16	—	.65 ***	.13
不適応感(Week 2)	—	—	.55 ***	—	—	.40 ***	—	—	.37 **
R^2	.35 ***	.47 ***	.58 ***	.20 **	.34 ***	.47 ***	.20 **	.61 ***	.48 ***

目的変数:各週の不適応感

註)Table内、中段の値は β の値である

Week 3: $F(6, 78)=12.11, p<.001$)。Week 1不適応においては、不適応想定が有意な傾向で正の影響($\beta =.21, p<.10$)を示し、自国ゆとり感が有意な負の影響($\beta =-.32, p<.01$)を示していた。また、Week 2不適応においては、自国ゆとり感が有意な負の影響($\beta =-.17, p<.05$)を示し、Week 1不適応が有意な正の影響($\beta =.65, p<.001$)を示していた。さらに、Week 3不適応においては、自国ゆとり感が有意な負の影響($\beta =-.24, p<.05$)を示し、Week 2不適応が有意な正の影響($\beta =.37, p<.001$)を示していた。

このことから、学業生活不安領域において1週目には、不適応想定が高い者は異文化不適応感が高くなり、また、異文化体験前の自国でのゆとり感が高い者は異文化不適応感が低くなることが示された。2週目になると、不適応想定の影響は有意ではなくなるが、1週目同様に、異文化体験前の自国でのゆとり感が高い者は異文化不適応感が低くなり、1週目の異文化不適応感が高いと2週目の異文化不適応感が高くなることが示された。そして、3週目では、2週目の異文化不適応感が高いと3週目の異文化不適応感が高くなるのに加え、異文化体験前の自国でのゆとり感が高いと、異文化不適応感が低くなることが示された。

考察

本研究では、異文化体験前の認知を含む異文化体験者の個人特性が異文化体験時の不適応感に影響するのかを検討するために、異文化体験前の認知や自国での生活に焦点を当てた縦断的研究を行った。

異文化不適応感の推移

重回帰分析に先立ち、異文化不適応感の推移を1要因分散分析により検討したところ、文化的的精神不安および日常生活不安の領域においては、不適応想定よりも実際の不適応感は低くなっていた。また、学業生活不安の領域においては、Week 3の不適応感がそれ以前の適応感及び不適応想定よりも低くなっていた。

学業生活不安においては、Week 3の不適応感がそれまでの時点よりも低くなっており、異文化適応が徐々に進んでいると考えられる。また、文化的的精神不安および日常生活不安の領域では、異文化体験時の時点の間には有意差は見られなかったが、数値的には徐々に値が小さくなっている。このことから全体的にみると、1か月という短期の語学留学であっても、その間で、徐々に異文化適応が進んでいくのではないかと考えられる。

文化的的精神不安領域の異文化不適応感への影響

文化的的精神不安領域における個人特性の異文化不適応感への影響を検討するために、重回帰分析を行ったところ、Week 1不適応へは異文化体験前の不適応想定が影響し、Week 2不適応へはWeek 1不適応が影響していた。また、Week 3不適応へは、Week 1およびWeek 2不適応、自国ゆとり感が影響していることが示された。そのため、文

化的的精神不安領域の異文化不適応において、仮説1および2は一部支持され、仮説3は支持されなかった。

異文化体験初期(本研究におけるWeek 1)における文化的的精神不安領域の異文化不適応感へは、異文化体験前の不適応想定が決定因子となることが示された。この文化的的精神不安領域は、精神的な不安を測定できる因子構成であり、精神的な不安を含む項目が多い。そのため、異文化へ移行することに対する不安など、体験前の認知や思考が文化的的精神不安領域の異文化不適応に影響したのではないかと考えられる。異文化を実感することに対する不安が異文化体験前から存在することで、異文化体験前の不安が維持され、異文化体験時に文化の移行に対する不安を感じながら生活をする中で、異文化での不適応感が高くなったのではないかと考えられる。この不適応想定の影響は異文化体験初期の異文化不適応感のみに見られ、以降の異文化不適応感には直接的な影響は見られなかった。ただし、初期に決定づけられた異文化不適応感を介して、不適応想定が初期以降の異文化不適応感を決定づけていると考えられる。このことは、異文化体験前の不安の認知が、間接的に異文化体験初期以降の異文化不適応感に影響していることを示していると考えられる。

また、異文化体験後期(本研究におけるWeek 3)において、異文化体験前の自国ゆとり感が異文化不適応感の決定因子となることが示された。つまり、自国でのゆとり感が低かった者は、異文化体験後期の不適応感が高くなる。この影響は異文化適応過程に沿ったものであると考えられる。Oberg(1960)によると、異文化適応過程の紆余曲線は第一段階が「ハネムーン期」で新しい環境を楽観的にとらえる段階であり、個人差はあるものの、異文化体験から1週間程度持続するとされ、第2段階の「ショック期」は、新しい文化への敵対心のあらわれである。ゆとりの低かった者の中には、新しい文化での生活ができることで、精神的に高揚しており、「ハネムーン期」の段階にいたが、異文化体験が進むにつれ、敵対心などが生まれる「ショック期」の段階となり、精神的な落ち込みが発生すると考えられる。そのため、異文化体験後期において、自国ゆとり感が決定因子として出現したと考えられる。

日常生活不安領域の異文化不適応感への影響

日常生活不安領域における個人特性の異文化不適応感への影響を検討するために、重回帰分析を行ったところ、Week 1不適応へは異文化体験前の不適応想定および自国ゆとり感が影響し、Week 2不適応へはWeek 1不適応が影響していた。また、Week 3不適応へは、Week 2不適応および自国ゆとり感が影響していることが示された。そのため、日常生活不安領域の異文化不適応において、仮説1および2は一部支持され、仮説3は支持されなかった。

異文化体験初期における日常生活不安領域の異文化不適応感に対し、異文化体験前の不適応想定が決定因

子となることが示された。この因子には、生活スタイルに関する項目があり、これまで生活してきた環境とは別の環境で生活することに対する不安や期待が異文化体験前に存在したと考えられる。異文化での日常生活に期待していた者は、自身の期待するような結果を求め行動することで、異文化不適應感を抱かなかったと考えられる。その反面、異文化での日常生活に不安を抱いていた者は、自身の不安に思っているような結果ばかりを考え、不適應的な行動に至ったことにより異文化不適應感を抱いたのではないかと考えられる。さらに、Sherer, et al.(1982)は、自己効力感の中には、行動を起こし、その行動を完了しようとする努力をし、逆境に立ち向かう時には我慢をできるという3つの要素が存在すると述べている。このことから、異文化体験に対する期待が、自己効力感的に作用し、異文化体験時の適應感に影響していたのではないかと考えられる。

また、異文化体験初期における異文化不適應感へは、自国ゆとり感も決定因子となることが示された。これは、日本文化から米国文化の生活形態への急激な変化によって生じるのではないかと考えられる。異文化体験者の中でも、今までの生活へのゆとりがない者は、日常生活そのものが変わると、今まで以上の不安や不満を抱えるのではないかと考えられる。また、ゆとり感とは、広辞苑(第6版)によれば、「余裕があること。窮屈でないこと。」であり、また、富田・高橋(2003)によれば、「不安や葛藤に飲み込まれない心の落ち着き」であるとされている。つまり、自国でゆとりを感じていなかった者は、その時点ですでに、「余裕のない状態、不安や葛藤のある状態」であり、一方で、ゆとりを感じていた者は、「余裕のある状態、不安や葛藤のない状態」であったと考えられる。そのような中で、自国に対してゆとりのなかった者は、異なる生活スタイルや生活面の文化差を感じることで、異文化体験初期に異文化不適應感を抱いたのではないかと考えられる。一方、ゆとりのあった者は、少なからず、不安や葛藤は体験していると考えられるが、異文化体験前から余裕があり、ゆとり感が低い者と比べると、異文化不適應感を抱かなかったのではないかと考えられる。

今回の調査を行った日本人留学生が所属していた America Plus Language and Culture Programはホームステイプログラムであり、留学生は皆、現地の家庭に入り生活をしてきた。このことも、自国でのゆとりがなかった者が異文化不適應感を抱く要因になったとも考えられる。鹿浦(2007)は、ホームステイをする留学生が、ホームステイ時の生活に満足せずに、ストレスを感じていることを自由記述式の質問紙により明らかにしている。このことから分かるように、異文化での日常生活は、自国にいるよりもストレスを感じやすい生活になることが考えられる。そのため、自国でのゆとりが低かった者は、余裕がなくなり、異文化不適應感を抱いていたと考えられる。

しかし、現地の生活に徐々に慣れていくことにより、異文

化での生活に対する不満の源やストレスが徐々に減っていき、異文化体験中期(本研究におけるWeek 2)には、自国ゆとり感の異文化不適應感への影響が見られなくなったと考えられる。ただし、異文化体験後期になると、文化的精神不安領域と同様に、生活そのものにも敵対心を持つようなショック期に入ることによって、本来ゆとりがなかった者は、余裕がなくなり、不満やストレスが溜まっていったのではないかと考えられる。そのため、異文化体験後期において、自国ゆとり感が決定因子の1つとなったと考えられる。

学業生活不安領域の異文化不適應感への影響

最後に、学業生活不安領域における個人特性の異文化不適應感への影響を検討するために、重回帰分析を行ったところ、異文化体験前の不適應想定および自国ゆとり感がWeek 1不適應へ影響しており、Week 2不適應へはWeek 1不適應および自国ゆとり感が影響していた。また、Week 3不適應へは、Week 2不適應および自国ゆとり感が影響していることが示された。そのため、学業生活不安領域の異文化不適應において、仮説1は一部支持され、仮説2支持されたが、仮説3は支持されなかった。

異文化体験初期における学業生活不安領域の異文化適應感へも、異文化体験前の不適應想定が決定因子となることが示された。この因子は、言語学習に関するだけでなく、大学での人間関係など、学業全般に関する不安の項目であり、学生の軸である学業に対する不安や期待が異文化体験時の学業生活における学習やコミュニケーションに対して存在したと考えられる。異文化体験前に、異なる言語を使用して学習やコミュニケーションを行うことへの期待が存在すると、異文化における学業場面において楽しみが見いだせ、満足感が高まることで、異文化に対して適應できるのではないかと考えられる。一方、異文化体験前に、異なる言語を使用して学習やコミュニケーションを行うことへの不安が存在することで、実際に異文化での学業生活に触れた時に、予測していた不安な状況を体験し、異文化不適應感が生じたのではないかと考えられる。しかし、異文化での学業生活に触れていくにつれ、その不安が解消されることで、異文化不適應を感じるものがなくなっていくことが考えられる。そのため、異文化体験前の不適應想定が異文化体験中期以降の異文化不適應感へ直接的に影響を及ぼすことがなくなるのではないかと考えられる。

また、学業生活不安領域の異文化適應感へは、自国でのゆとり感が異文化体験全体を通して影響していることが示された。このことから、自国ゆとり感とは、異文化体験時の学業生活における異文化不適應感の決定因子であると考えられる。今回の調査参加者は日本の大学に通う大学生であったこともあり、自国での本業は学生であった。そのため、1日、1週間の大半を占めるのが大学生活であるために、自国でのゆとりという概念の中に大学生活のことが含まれていた可能性が考えられる。学生であるために、大学生

活のことを想定するのは必然である。大学生のゆとりととらえていたとすれば、これまでの自国でのゆとりがなかった者は、日本の大学よりも、コミュニケーションや学習が困難になる異文化において、困難感やストレスが溜まり、学業生活面での異文化不適応感が高くなったのではないかと考えられる。一方で、自国での大学生活にゆとりがあった者は、その余裕から、新しい大学で学ぶ意欲や楽しみが湧き、異文化不適応感を抱くことがなかったのではないかと考えられる。

不適応想定とゆとり感の全体的考察

全体的に見て、不適応想定は異文化体験初期の不適応感に影響しており、自国ゆとり感は異文化体験全体を通して不適応感に影響していることが示唆された。ただし、自国ゆとり感に関しては、不適応感の各領域で傾向が異なることが示された。

不適応想定に関しては、自己成就予言の効果が働いたとも考えられる。不適応想定時に期待が高かった者は、想定時の自身の期待に比べようと、その期待に基づき行動をした結果、期待通りの状況となり、自身が適応できているように感じていたのではないかと考えられる。一方、不適応想定時に不安が高かった者は、その不安に基づき行動をすることで、不満や不快な事象が増えることで、予測していた不安通りの状況となり、自身が適応できていないように感じていたのではないかと考えられる。

自国ゆとり感の異文化不適応感の影響に関しても、これまで考察してきたようなことが考えられるが、ハネムーン期の影響は、文化的精神不安領域にのみ限定されていた。このことに関しては、文化的精神不安領域と日常生活不安および学業生活不安領域の違いとして、文化的精神不安領域には情動に関する項目が多く、日常生活や学業生活不安の領域には道具的な項目が多い。ハネムーン期は高揚感や興奮のある時期であるため、情動反応を問われる文化的精神不安領域にのみ自国ゆとり感の影響が出現したのではないかと考えられる。そして、日常生活や学業生活不安領域の、できるかできないかの道具的な結果を問われる日常生活不安および学業生活不安の領域にはハネムーン期の影響がなかったのではないかと考えられる。

自律的留学動機の異文化不適応感への影響

各因子における異文化不適応感に対して、異文化体験前の自律的留学動機の影響は有意に現れることはなかった。このことから、異文化適応は自律的留学動機に依存しない要因ではないかと考えられる。今回は異文化体験前の不適応想定という認知とゆとり感とともに分析を行ったことで、留学動機そのものの影響だけでは異文化適応を決定づけることがないのではないかと考えられる。先行研究において、自律的留学動機が高いと適応できる(田畑・田中, 1991; 譚ら, 2009)という示唆は事例的な研究や相関分析により弱い相関が見られたという結果からであり、自律的留

学動機の高さに関わらず適応はできる(若生ら, 2012)という示唆も事例研究の結果からであった。これらのことを踏まえると、自律的留学動機は、動機づけそのものが直接的に異文化適応に影響するものではなく、他の要因の緩衝要因であったり、他の要因を決定づけることで間接的に異文化適応に影響するとも考えられる。

結論

異文化不適応感の各領域を通して、異文化体験前の不適応想定は、異文化体験初期の異文化不適応感に影響し、その後、初期の不適応感を介して、間接的に先の異文化不適応感へ影響をしていくと考えられる。

また、自国ゆとり感が異文化体験時の不適応感に影響しているが、領域ごとでその時期は異なると考えられる。

今後の課題

本研究では、1か月の短期プログラムの留学生を対象とした。そのため、異文化体験前の個人特性の短期的な影響を限定的に見た結果と言える。もちろん、短期的にであっても、異文化体験前の認知や生活の特性が異文化体験時の不適応感に影響していた。しかし、より長期的な視点で研究をしていくことで、今回の結果とは異なる結果を得ることが可能になると考えられる。よって、より長期的な留学生を対象とすることで、異文化体験前の個人特性による適応感の持続や変化を検討することが可能になるであろう。

また、本研究では、異文化体験前の不適応想定という概念を不安と同様の概念であるとして用いた。そして、対概念として、期待があると考えていた。しかし、期待と不安を1つの次元としてとらえることには限界があると考えられる。このことは、本研究の不適応想定値の低い者(期待をしている者)が異文化不適応感を抱きにくいという結果は、期待が大きいと不適応感を抱くことにつながるとした宮城(2005)の研究結果と反するものとなっていることから言えることである。そのため、今後の研究においては、期待と不安の2つの概念を1次元上の対になった概念ではなく、期待と不安という2次元上に直交した概念としてとらえることが必要であると考えられる。

さらに、今回の結果から、認知を含む異文化体験前の個人特性が異文化不適応感へ影響をしていることが明らかとなった。このことから、異文化体験予定者が不適応に陥る前にそれを予防あるいは軽減するための有効なトレーニングを行い、不適応想定などの認知を変容させることが可能かどうかを検討する必要があると考えられる。

引用文献

- 安達理恵 (2008). 日本人の異文化受容態度にみられる傾向:一地方都市での年代別・国別態度調査より. 名古屋外国語大学外国語学部紀要, 35, 153-173.
- Baker, R. (1981). *FSA (Freshman's Scale for Adjustment)*. A

- research manuscript. Clark University.
- 江村裕文 (1993). 留学生の異文化適応. 法政大学教養部紀要 外国語学・外国文学編, **85**, 1-11.
- 古川秀夫・山下京・八木隆一郎 (1993). ゆとりの構造. 社会心理学研究, **9**, 171-180.
- 外務省領事局政策課 (2013). 海外在留邦人数調査統計. 外務省.
- 早矢仕彩子 (2003). 異文化間の臨床実践. 田畑治・金井篤子・森田美弥子(編). 臨床実践の知: 実践してきたこの私 (pp.129-142). ナカニシヤ出版.
- 星野命 (2010). 星野命著作集II: 異文化間教育・異文化間心理学. 北樹出版.
- 川内規会 (2006). 大学生の異文化適応と心理的不安の変化に関する研究. 青森県立保健大学雑誌, **7**, 37-43.
- Kim, Y. Y. (2001). *Becoming intercultural: An integrative theory of communication and cross-cultural adaptation*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 小林亮 (2000). 自文化アイデンティティが異文化適応に及ぼす効果: 日欧の交換留学生を対象とした比較文化調査. 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, **162**.
- 小林亮・Wangwan, J.・渡辺文夫 (2009). 異文化適応と心理教育. 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, **92-93**.
- 小泉令三 (1995). 中学校入学時の子供の期待・不安と適応. 教育心理学研究, **43**, 58-67.
- 黒木雅子 (1996). 異文化論への招待. 朱鷺書房.
- Lilienfeld, S. O., Lynn, S. J., Namy, L. L., & Woolf, N. J. (2009). *Psychology: From Inquiry to Understanding (1st ed.)*. Boston: Allyn & Bacon.
- Lysgard, S. (1956). Adjustment in a foreign society: Norwegian fullbright grantees visiting the United States. *International Science Bulletin*, **7**, 45-51.
- 宮城徹 (2005). 省察的授業計画の過程研究: REXプログラム事前研修における『異文化適応』『オーラルコミュニケーション入門』授業と研修修了生に対するインターネットカウンセリングの関連付けの試み. 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集, **31**, 125-139.
- 宮城徹 (2011). 国費学部進学留学生の動機づけ, 異文化適応, 成績等の関連について (I): 関係先行研究についてのレビュー. 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集, **37**, 29-45.
- 文部科学省高等教育局学生・留学生課 (2010). 我が国の留学生制度の概要: 受入れ及び派遣. 文部科学省.
- 中村裕介・石川悟 (2010). 異文化接触経験が価値観に与える影響. 日本パーソナリティ心理学会第19回大会発表論文集, **25**.
- 新村出(編) (2008). 広辞苑(第6版). 岩波書店.
- Oberg, K. (1960). Culture shock: Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthology*, **7**, 177-182.
- サザーランド真理亜 (2010). 異文化接触に必要な能力. プロジェクトマネジメント学会誌, **12**, 29-30.
- Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. (1982). The Self-Efficacy Scale: Construction and Validation. *Psychological Reports*, **51**, 663-671
- 鹿浦佳子 (2007). ホームステイにおける日本語学習の効用: ホームステイ, 留学生, 日本語教員の視点から. 関西外国語大学留学生別科日本語教育論集, **17**, 61-112.
- 島田裕巳(編) (1991). 異文化とコミュニケーション: オタク国家・日本の危機. 日本評論社.
- 孫怡 (2009). 在日中国人の異文化適応: パーソナリティ特性からの影響. 人間文化創成科学論叢, **12**, 241-248.
- 田畑佳則・田中共子 (1991). 広島大学における留学生指導の現状と課題: 留学の動機を中心にして. 広島大学留学生センター紀要, **2**, 43-63.
- 高井次郎 (1989). 在日外国人留学生の適応研究の総括. 名古屋大学教育学部紀要, **36**, 139-147
- 高島直子・五十嵐靖博・平尾元尚・清水京子・中村延江 (2004). 美容専門学校生の学校適応感・ゆとり感と心身の健康度. 山野研究紀要, **12**, 33-42.
- 譚紅艷・今野裕之・渡邊勉 (2009). 異文化の対人適応における動機づけの影響: 中国人留学生を対象に 対人社会心理学研究, **9**, 101-108.
- 富田真弓 (2008). 心のゆとり感尺度の作成の試み. 九州大学心理学研究, **9**, 223-233.
- 富田真弓・高橋靖恵 (2003). 青年期の心のゆとりに関する研究: 自己調整との関連. 日本青年心理学会第11回大会発表論文集, **52-53**.
- 上原麻子 (1988). 留学生の異文化適応. 広島大学教育学部日本語教育学科(編). 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究(pp.111-124) 広島大学教育学部日本語教育学科.
- 若生正和・長谷川ユリ・中山あおい (2012). 日本留学の動機・体験・効果: 交換留学生を中心に. 大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学, **61-1**, 169-184.
- 渡辺文夫 (2002). 異文化と関わる心理学: グローバリゼーションの時代を生きるために. サイエンス社.
- Yamada, R., Thompson, H. F., & Thompson, M. (1994). Cross-cultural adjustment of American school in Japan: Preparing for the experience. 北海道東海大学紀要 人文社会科学系, **7**, 115-129.

註

¹ 本研究は、第一筆者が帝塚山大学心理福祉学部所属時に、卒業論文研究として行った調査を再分析したものである。

² America Plus Language and Culture Programは、Portland State University, Oregon, USの短期語学留学プログラム(1か月)であり、プログラム担当者の協力により調査を行った。また、全4回の調査全てに参加した留学生のデータをもって、最終有効データとした。

³ Tableにおける有意確率(p)は、*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$ である。

**The effect of personal properties before cross-culture
to cultural maladjustment:
In view of the expectation of maladjustment, the sense of YUTORI,
and the motivation**

Hirokatsu TETSUKAWA, Junichi TANIGUCHI and Takaharu MORISHITA

Abstract

The purpose of this study was to investigate the causes of maladjustment for short-term overseas students. We focused on the expectation of maladjustment, the sense of YUTORI, the motivation for studying abroad. The expectation of maladjustment and the sense of YUTORI are the core of our study. The expectation of maladjustment is cognition before moving to another culture that "I will be unable to adjust to the new culture." Moreover, YUTORI is the idea that people spend their life with great amounts of stability or flexibility such as time, presence of mind and energy. The hypothesis of this study was that the high expectation of maladjustment would lead to cultural maladjustment. On the other hand, the high sense of YUTORI and high motivation for studying abroad would lead to cultural adjustment.

132 Japanese overseas students studying at Portland State University, Oregon, the U.S. for one month participated. It was a longitudinal study of four in every other week, and 85 of them (43 men and 42 women) filled out all four surveys throughout, and their age range was 18 to 36 ($M=20.25$, $SD=2.24$).

We analyzed the relationship between personal properties and cultural maladjustment with multiple regression analysis. As a result, the high expectation of maladjustment influenced to only first week of cultural maladjustment. In addition, the low sense of YUTORI affected cultural maladjustment in various points. However, the motivation for studying abroad did not have significant influence to cultural maladjustment. Incidentally, the former stages of cultural maladjustment affected latter stages of it.

In conclusion, the expectation of maladjustment might be a factor determining the early stages of cultural maladjustment. Even though the expectation of maladjustment did not affect the latter weeks of cultural maladjustment, it might affect the latter weeks of cultural maladjustment through early stage of cultural maladjustment.

Keywords: cultural maladjustment, the expectation of maladjustment, the sense of YUTORI, the motivation for studying abroad